cm，重量20 kg，術前日の穿刺量を合わせて35 kg，組織学的には偽ムチン嚢腫であった。文献上においてもかなり上位を占める巨大例であり。その穿刺量においては本邦最高であった。

48. 胆嚢摘出後発生せる黄疸の一治験例

赤井寿紀・田　紀克・藤代国夫・吉永雅俊（成東病院）
柏原英彦・渡辺一男（千大）

患者は30才の女性で他医にて胆石症と診断され胆嚢摘出術を受け，術後4日目に黄疸が出現した。薬物性肝障害の診断のもとに，ステロイド治療を受けていたが，術後3ヵ月して当院へ転移してさた。肝機能検査の結果閉塞性黄疸が疑われたため経皮経肝胆管造影施行の上，その閉塞像より，胆嚢管をしばる際に総胆管も含めてしばってしまったものと診断した。瘢痕性胆道狭窄の診断のもとに再手術を行ない，総胆管十二指腸側々吻合を行なった。経過は順調で術前80倍であった黄疸指数は退院時には5倍となり再手術後23日で全治退院した。

瘢痕性胆道狭窄は胆道系術後障害の10%前後を占めているが，日常の胆嚢摘出術において常に発生し得る可能性があり，安易な気持ちで手術を行なえばこのようなことも起り得るという点で，改めて反省したい。

49. 小腸広汎切除をした一症例

川村　功（大塚病院）
西沢　直・堀部治男（国立千葉）

症例は18才，男，学生で虫垂穿孔性腹膜炎にて手術をうけて3ヵ月後イレウスとなり，ショック状態で国立千葉病院に転院してきた。

回腸末端近くより盲腸，後腹膜に至る索状物による絞扼性イレウスで3.3 mの小腸が壊死に陥っていた。手術は1回目に壊死小腸切除と腸瘻作成を，2回目は16日後，空腸横行結腸吻合を，3回目は，10ヵ月後，空腸上行結腸起始部吻合をした。3度の手術後残存小腸は60 cmである。術後激しい下痢，体重減少，貧血，低K血症に襲われたが，栄養管理と対症療法により現在はほぼ正常の生活をするに至っている。消化ボールテストでは，広汎切除後11ヵ月で，坂田の分類の遅延型を呈していた。最近経験した小腸広汎切除の一症例に多少の文献的考察を加えて報告した。

50. "急性胆嚢捻転症の2例"

鈴木昭一・関　幸雄・斎藤全彦（清水厚生）

症例I，は83才の女性で，穿孔性虫垂炎の診断で開腹。症例II，は76才の女性で，穿孔性腹膜炎の診断で開腹手術を行なった。ともに胆のうは壊死に陥っていたため，胆のう摘出術を施行した。術後，症例I，は呼吸不全のため翌日死亡し，症例IIは，術後76日目で全治退院した。

本症は60才以上の女性に多く，また術前診断はきわめて困難で，本邦においては術前に確定診断をしえた例はない。また胆のうの捻転方向および捻転度は360度1回転以下のものが大部分である。手術は胆のう摘出術を行ない，単に整復のみにとどめるべきではない。その発生誘因は，Carterらによる先天性移動性胆のう，Bak'sらの周囲消化管の蠕動の影響などがいわれている。

急性胆のう捻転症は比較的まれな疾患で，最近われわれが経験した2例を報告するとともに，若干の文献的考察を加えた。

51. 両側性乳癌の一治験例

斎藤弘司・大和田操・石崎省吾・坂田早苗（宇都宮外科）

症例：51才♀，S. 44. 8. 左乳房外下部に1.5×1.5 cmの腫瘤に気付く。S. 44. 9. 26. 左乳癌根治術施行。組織像 infiltrating medulary carcinoma 8ヵ月後右乳房切断術施行。組織像 infiltrating scirrhous carcinoma 考察：両側乳癌は両側性原発性乳癌と両側転移性乳癌とに分けられ，前者はさらに同時性と異時性とに分けられる。両側性乳癌で問題となるのは，第一に判定基準，乳癌の80%は組織学的に乳頭腺管癌あるいは硬性癌のごとく似た組織像であり，たとえ両側とも原発性であっても似た組織像を示す場合が多く，従って判定は主として臨床的な見地から行なわれている。本症例も臨床面より異時性と判定している。第2に発生頻度：同時性のものは0.3～2%異時性のものは0.9～6.5%であり，転移性のものより原発性のものの方が多い。第3に予防対策：①対側経過観察，②定期的対側乳房生検，③ホルモン療法④予防的卵巣摘出，⑤予防的卵巣X線照射，⑥対側乳房予防的切断があるが⑥はいささか行き過ぎの感がある。